

若手講師を対象とした基本的授業技術を高める 研修プログラムの開発

Development of Training Programs to Improve Basic Teaching Skills for Young Temporarily Appointed Teachers

齋藤建樹¹、長倉 守²SAITO Tateki¹, NAGAKURA Mamoru²

[キーワード Keyword]	基本的授業技術、研修プログラム、若手講師
[所属 Institution]	¹ 岐阜県公立小学校 (Public Elementary School, Gifu Prefecture)、岐阜大学大学院 (Graduate School of Education, Gifu University) ²

[要 旨 Abstract] 現在、教員の大量退職、大量採用により世代交代が進んでおり、若手教員の育成が喫緊の課題となっている。若手の中でも、初任者に対しては教育委員会の支援による手厚い研修が行われているが、臨時的任用教員である講師に対しては公的な指導、支援が行われていない。そのため、十分な経験を積むことなく教壇に立つ講師も少なくない。そこで、若手講師を対象にした研修が急務であると考え、発問や指示などを中心とした基本的授業技術を高める研修プログラムを開発し、若手講師4人を対象として全7回にわたる研修を実施した。研修プログラムを通じた若手講師の授業力量向上に関する成果と課題を明らかにするとともに、研修プログラムの改善の方向性を提示した。

1. はじめに

現在、学校現場は、教員の大量退職、大量採用により、教員の世代交代が急速に進んでいる。このような状況の中で、若手教員の育成が喫緊の課題となっている。かつては、学校現場における実践の中で、経験豊富な先輩教員から経験の少ない若手教員へと知識・技能が伝承されることで資質能力の向上が図られてきたという側面が強かった。

しかし、近年の状況については、中央教育審議会 (2015) において「近年の教員の大量退職、大量採用の影響により、必ずしもかつてのような先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承がうまく図られていない状況がある」と指摘されるなど、教員の資質向上を図ることが重要な課題となっている。こうした状況の中、2017年には、教育公務員特例法が改正され、都道府県教育委員会には、「教員としての資質に関する指標」及び「教員研修計画」を策定することが義務付けられた。初任者研修は、それらの指標及び研修計画に基づいて実施されている。

ところが、臨時的任用教員である講師については、教員育成指標には育成の対象として位置付けられておらず、公的な支援が十分に行われていない。そのため、十分な経験がないまま教壇に立つ講師が少なくない。第一筆者の勤務校では講師が5人採用されているが、経験の浅い教職1年目、2年目の講師については、力量形成に向けた意欲は十分にあるものの、自ら具体的な向上方略を見出すことが容易ではない状況である。

そこで、若手教員、特に、公的な支援を受けることが少ない講師を対象にした研修が急務であると考え、勤務校における研修プログラムの開発を構想した。その際には、日々の授業実践の基盤となる「基本的授業技術」に着目して研修を行うことが有効であると考えた。都道府県の教員育成指標においても、教員に求められる資質能力として、「教育活動をはじめ職務の遂行に必要な基礎的な指導技術、技能を習得」や「基礎的な知識及び指導技術を習得」等が記述され、基本的授業技術を身につけることの重要性が示されている。

そこで本研究では、若手講師を対象とした、発問や指示等の言語的要素を中心として、非言語的な要素も含めた基本的授業技術を高める研修プログラムを開発し、若手講師の授業力量向上に関する成果と課題を明らかにすることを目的とする。そのうえで、研修プログラムの改善の方向性を提示する。なお、本開発実践では「基本的授業技術」について、「発問や指示などの言語的な要素はもとより、表情、声、動線などの非言語的な要素も含めた基本的な授業の技術」と定義づける。授業の実施にあたり身につけておくべき教師の技

術を対象として、これをいくつかの要素に細分化し、それらの要素に対して重点的に取り組むことにより、効果的な研修が可能になると考える。

2. 方法

本研究では、次の三つのフェーズを設定し検討を行った。

2.1. 研修プログラムの内容開発

研修プログラムの内容開発にあたって、基本的授業技術を構成する要素の検討を行った。そのために、先行研究における基本的授業技術の検討を行った。先行研究の対象として取り上げたのは、教育方法学における斎藤喜博、大西忠治、吉本均、向山洋一、教育心理学における自己調整学習研究会である。また学校現場における実践知を析出するため、都道府県の教員育成指標や総合教育センターの研修資料を分析の対象とした。

2.2. 研修プログラムの実施

研修プログラムとして構成する内容については、検討した要素をもとに、参加者のニーズを踏まえ、次のように実施した。

- ・対象 第一筆者の勤務校に在籍する講師4人(20代3人、30代1人)
- ・方法 講義(演示を含む)と演習及び日常の授業へのコメント

2.3. 研修プログラムの検証と改善の方向性の検討

検証方法は、次のとおりである。

- ・参加者による評価
基本的授業技術に関する自己認識、最終レポートにおける自由記述、研修に対する評価
- ・筆者による参加者の評価
授業場面の動画映像、模擬授業

これらの分析をもとにして、より実践的、実用的な改善プランの方向性を検討する。

3. 研修プログラムの内容開発

3.1. 先行研究における基本的授業技術

まず、斎藤喜博(1983)は、発問の重要性を強調しており、中でも「その時間の授業の方向をきめていく授業最初の発問」については、重視する必要がある。その一方で、排除すべきものの代表としては「無意味な、教師と子どもの問答」を取り上げたい。それは、貴重な授業時間を浪費することは、何が何でも避ける必要があるからである。さらに、「無言の意思表示とか表情」といった、非言語的な要素も、教師の人間性を示すうえで重要であると考ええる。

次に、大西忠治(1988)は、「発問化のセオリー」や「指示のセオリー」やプロ教師として使い分けるべき3つの発問を示している。中でも、発問化第一のセオリー「教材の中に『あいまいなどころ』を見つけ出せ」は、授業を活性化させるうえで、有効であると考ええる。また、B「大きな発問」は、一問一答的な授業展開を避け、授業の大きな流れをつくっていくうえで重要である。また、指示のセオリーで述べている「一指示一行動」や、その発展形としての「多指示行動」は、具体的に子どもたちに行動させるときに、必ず使いこなさなくてはならない基本的技術であると考えられる。

続いて、向山洋一(1984、2009)は、教育技術の具体に言及している。「授業の原則」10ヵ条は、授業における教師の具体的な行為を取り上げており、「できている」「できていない」をはかるものさしとして非常に明確である。また、TOSS授業技量検定の初級(E表、D表)の評価項目は、まさに生きて動いている授業その場における教師の姿を評価するものであり、最低限身に付けておくべき基本的教育技術として取り入れるのに有効であると考ええる。

続いて吉本均(1977、1980)は、「教授行為のなかで、もっとも重要なものが発問」であると述べ、発問づくりの重点を示している。中でも、「『発問』は、教えねばならないものを直接教えず、子どもたちの学びたいものに転化する。」「『既知』を動員すれば、困難だが何とか解決の糸口をみつけることができそうだ

という『発問』こそ、子どもたちの学習行為を促す。」「『発問』は、学習集団内部に対立・分化をよびおこすものでなくてはならない。」については、基本的授業技術としての発問づくりの重要なヒントとなる。

自己調整学習研究会（2016）は、教育心理学の立場から「自ら学ぶ」ということの重要性を示している。そのうえでこれには、教師の適切な働きかけが不可欠であるとしている。こうした立場から、説明や発問といった授業中の指導の基本技術に関する内容について述べている。中でも、「説明する技術」の一つとして紹介された「先行オーガナイザー」は、学習者の理解を助けるうえで有効であると考えられる。また、「発問する技術」として、「開いた発問」と「閉じた発問」を、場面を意識して使い分けることは、授業を組み立てるうえで非常に重要な点である。さらに、学習者の「意欲や情動」の観点から、授業冒頭における簡単な質問によって学習者の注意喚起や意欲促進の効果が期待できるというのも注目すべき点であると考えられる。

3.2. 基本的授業技術に関する実践知

都道府県の教員育成指標や研修資料においても、「教育活動をはじめ職務の遂行に必要な基礎的な指導技術、技能を習得し」や「基礎的な知識及び指導技術を習得」等が記述され、基本的授業技術を身につけることの重要性が示されている。

岐阜県では、岐阜県総合教育センター（2020）において、「岐阜県が求める教師像」として「指導方法を工夫し、児童生徒に確かな学力をつける教師（確かな専門性）」という記述がある。すなわち、児童生徒に確かな学力を身に付けさせるために、指導方法を的確に工夫できるということが、教師の資質として求められているということである。授業等の場面において「指導方法を工夫する」という弛まぬ努力の積み重ねが、基本的授業技術を研鑽することにつながると考えることができる。

東京都では、教職員研修センター（2019）において、基礎形成期（1年目～3年目）の教員に「学習指導力」を身に付けることを求めている。学習指導力には、「児童・生徒の興味・関心を引き出し、個に応じた指導ができる。」「主体的な学習を促すことができる。」「学習状況を適切に評価し、授業を進めることができる。」等が示されているが、それらの基盤となるものが基本的授業技術であると指摘することができる。

長野県では、長野県教育委員会（2013）において、「長野県の教員に求められる資質能力」として、「『教育のプロ』としての高度な知識や技能」を示している。特に「基礎形成期」である若手の時期には、「先輩教員の姿から、専門的な知識や技能を学ぼうとしている。」「よい授業を数多く見ようとしている。」等、基本的授業技術を積極的に学ぼうとする姿勢が強く求められているといえる。

他方、教員研修資料・ハンドブックにおいても、基本的授業技術の重要性は指摘されている。これらは、都道府県教育委員会が求める基本的授業技術を、授業等で使い易いようさらに具体化した内容になっている。

徳島県立総合教育センター（2020）による「とくしま 授業技術の基礎・基本」では、「教師が授業中に必要とする授業技術」の一つとして「発問」を取り上げている。発問を「授業の流れを作る柱」として捉え、発問の種類や発問の仕方などを具体的に示している。このことから、発問を基本的授業技術の重要な要素として捉えていることが分かる。

千葉県教育委員会（2020）による「令和版 授業改善のためのセルフチェックシート」においても、「発問は、授業を支える柱である」、「発問は、学習内容を理解させ、ねらいに迫る重要な媒体である。発問の良し悪しが、よい授業になるかどうかの分岐点となる。」と述べられている。この資料では、発問の機能が、具体的な発問例とともに述べられている。このことから、授業の中で、発問の持つ多様な働きが生かされるようにすることが、基本的授業技術の向上につながると考えていることが分かる。

大分県教育センター（2016）による「ユニバーサルデザインの良さを取り入れた学級・授業づくりハンドブック」では、分かりやすい発問や指示になるように、表現の仕方を工夫するための指導・支援例が挙げられている。例えば、「一文で、一つの指示や動作を伝える」、「伝わりにくいことは、具体物や写真、イラストで補う」、「抽象的な表現は避け、具体的に表現する」などである。これらは、基本的授業技術の要素を、より具体的に表現したものと考えられる。

このように、各都道府県において、基本的授業技術を具体的に示すとともに、若手教員が基本的授業技術を身に付けることが重視されていることを指摘できる。

3.3. 研修プログラムの開発

以上の検討を踏まえ、表1に示すように、基本的授業技術を構成する要素として、11の指標と4つの項目に整理した。そのうえで、表2に示すように、研修プログラムを開発した。

表1 基本的授業技術を構成する要素

指標	項目
1 授業最初の発問が分かりやすく、活動しやすい	発問
2 無意図的で無駄な発問がない	
3 複数の発問が意図を持って組み立てられている	
4 指示が端的で短い	指示
5 発問に作業指示を組み合わせ、子どもの活動を促している	
6 数種類の作業指示を使い分けている	
7 授業の開始を笑顔で始めている	非言語・空間認識
8 教室全体に通る声で授業をしている	
9 全体へ話す際に、教室全体に視線を配り、一人一人に目を合わせている	
10 活動と活動を重ねるように指示をしている（リズムとテンポ）	応用・双方向
11 授業中のほめ言葉が具体的に豊富である	

表2 研修プログラム

回	月日	研修内容（テーマと主な内容）	指標	項目
1	2月7日	オリエンテーション ・本研修の意義 ・「基本的授業力を構成する要素の指標」について ・初回の自己評価		
2	2月14日	「意図が明確で分かりやすい発問」を身につけるために ・研修担当者による模擬授業の例示 ・指標1・2・3の解説 ・斎藤喜博の主張について	1・2・3	発問
3	2月21日	「明確で端的な作業指示」を身につけるために ・研修担当者による模擬授業の例示 ・指標4・5・6の解説 ・大西忠治の主張について	4・5・6	指示
4	2月28日	「授業の心地よいスピード感（リズムやテンポ）を身につけるために ・研修担当者による模擬授業の例示 ・指標10の解説 ・中間の自己評価	10	応用・ 双方向
5	3月6日	「子どもへの対応力（非言語的な対応を含む）を身につけるために ・研修担当者による模擬授業の例示 ・指標11の解説 ・ほめ言葉の演習	11	応用・ 双方向
課外	3月10日	参加者の日常の授業映像の録画及び授業に関するコメント		
6	3月13日	「あたたかな表情（笑顔）・適切な声の大きさとトーン」 「子どもへの視線（子どもと目が合う）」を身につけるために ・指標7の解説→「笑顔」の演習 ・指標8の解説→「通る声」の演習 ・指標9の解説→「視線」の演習・総合演習	7・8・9	非言語・ 空間認識
7	3月24日	研修のまとめ ・参加者による模擬授業演習 ・最終の自己評価 ・研修に関する感想や意見		

4. 結果と考察

4.1. 基本的授業技術に関する自己認識

基本的授業技術を構成する4項目と11の要素について、初回（第1回）、中間（第4回）、最終（第7回）の3回、参加者による自己評価を実施した（4件法）。サンプル数の問題により分布の正規性が確認できないため、初回と中間、最終の各時点における各項目の自己評価を比較するフリードマン検定を行った。

各時点における各項目の基礎統計量を表3に示す。フリードマン検定の結果、全体（ $\chi^2(2)=7.60$, $p<.05$ ）、発問（ $\chi^2(2)=7.60$, $p<.05$ ）に有意差が見られた。また、非言語・空間認識（ $\chi^2(2)=4.67$, $p<.10$ ）に有意傾向が見られた。そこで、ボンフェローニ法を用いた多重比較を行った。多重比較の結果、全体と発問における初回と最終に、それぞれ5%水準で有意差が見られ、最終の平均が初回の平均より有意に高かった。

表3 基本的授業技術に関する自己認識

	初回		中間		最終		多重比較
全体*	26.25	(2.28)	28.50	(1.50)	31.50	(2.29)	初回<最終*
発問*	6.00	(1.22)	7.25	(0.43)	8.50	(0.50)	初回<最終*
指示	7.25	(1.30)	7.75	(0.83)	8.00	(1.00)	
非言語・空間認識 [†]	9.00	(1.22)	9.25	(1.48)	10.00	(0.71)	
応用・双方向	4.00	(0.00)	4.50	(0.50)	5.00	(1.22)	

[†] $p<0.10$, * $p<0.05$ ()はSD

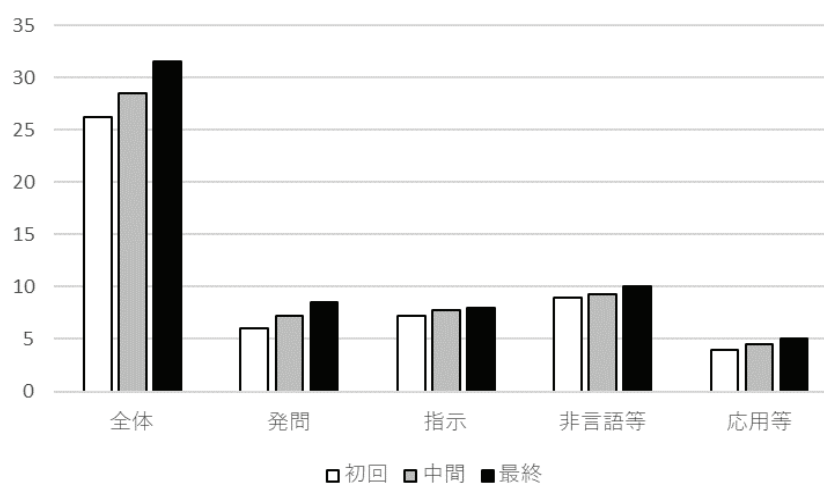


図1 基本的授業技術に関する自己認識の変化

これらのことから、本研修が、基本的授業技術に関する自己認識の向上に寄与したことが窺える。特に、発問の認識に影響を与えたと考えられる。これは、最終回において実施した模擬授業研修が寄与したと考える。

研修では、参加者は学んだことを生かし、発問を明確にした授業案を準備して模擬授業に臨んだ。発問については第2回で触れたがそれは講義に留まり、参加者に身に付いたという実感は得られなかったのではないかと。研修内容の省察と模擬授業の機会を通じて、研修の成果を発揮して実感を得ることができたと考える。

他方で、最終レポートの自由記述や筆者による評価に照らすと、どの参加者も、指示、非言語・空間認識、応用・双方向に含まれる技術の要素に関しても、意識して取り組むようになったと認められる側面もあった。これは、研修を通して、参加者が自己の足りない部分を自覚し、その部分を意識的に強化しようとしたこと

に起因すると考えられる。現状ではまだ十分身に付いていないという自覚があるため、各参加者の自己認識の評価には反映されていないが、今回の研修が基本的授業技術に関する視点に気付く契機になったと考えられ、今後のフォローアップがあれば、一層向上することが期待される。

以上のように、本開発実践で取り組んだ研修プログラムは、若手講師の基本的授業技術の向上に一定程度有効であることが明らかとなった。

4. 2. 研修プログラムに関する自由記述

表4は、研修プログラムに関する自由記述である。基本的授業技術、11の指標、模擬授業、その他の4つについて受講者に回答を求めた。表4からは、研修プログラムが概ね参加者のニーズに応える内容であったと考察できる。特に、基本的授業技術の指標を具体的に示し、その一つ一つに関して研修を深めていくという全体の組み立ては、自分自身の強化すべき点を発見したり、授業をつくる際の新たな視点を取り入れたりするうえで、役に立ったと考える。また、模擬授業のモデルを示す、参加者の実際の授業へのコメントをする、模擬授業や実技の演習をするなどの研修方法も、参加者にとって取り組みやすいものであったと考える。

ただ、受講者の自由記述にあるとおり、私が示した模擬授業のモデルの中にはややレベルの高いものがあり、現実の子どもたちの実態ではすぐについていけない可能性に関する指摘があった。

表4 研修プログラムに関する自由記述

(1) 基本的授業技術にしばって研修を行ったことについて
<ul style="list-style-type: none"> ・基本のことで大切なことを学べたのでよかった。 ・まずは1つでも多くの知識や技術を習得することが大切だと思っているので、大変役立った。 ・基本がまだまだできていないことを確認できました。 ・毎回いろいろなポイントを教えてくださったおかげで、自分の欠点を見つけることができました。
(2) 11の指標（要素）を示したことについて
<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に書かれていて、やるべきことが分かった。 ・自分の今の課題や成果を把握することができ、今後の成長へつながると思った。 ・自分にできることから少しずつ行うことができました。 ・初めて知ったことばかりで、今後の授業づくりの参考になりました。
(3) 研修担当者が模擬授業のモデルを示したことについて
<ul style="list-style-type: none"> ・授業のモデルを見られてよかった。 ・子ども視線をより意識することができた。毎時間の振り返りにも使えると思った。 ・授業を行う上での大事なポイントが分かりました。 ・道徳や英語のやり方が分かり、子どもたちとも関わり方、授業の組み立て方が浮かぶようになりました。
(4) その他全体を通した感想やご意見（よさや課題、改善案）
<ul style="list-style-type: none"> ・ていねいに授業（ビデオ）のアドバイスをくださってよかった。授業例、演習も楽しくやれた。 ・授業についてコメントしていただいた事は、今後の授業ですぐ活かしたいと思った。 ・演習がとてもためになりました。ビデオについても、自分が気付いていないせが分かりました。 ・自分の直すポイントが分かったことで、直していける道筋が見えたので、本当にありがたかったです。2か月間、ありがとうございました。次の学校でもがんばります！ ・授業例はレベルが高く、子どもを鍛えておかないと大変だと思う。

5. 改善案の検討

これまでの検討を踏まえて、改善プログラムの方向性を次のように検討した。それは、①基本的授業技術を構成する項目と要素の設定（継続）、②講義と模擬授業の組み合わせ、③短期集中型と中長期フォローアップ型の2つのフェーズ構成、④勤務時間等にも考慮しつつ必要な時間の確保である。

①については、本研修で示した基本的授業技術に関する11の指標の有効性を今後も活かしていく。②については、各回の研修の中に、講義・解説に加えて、少しでもよいので実技や演習の時間を確保する。③につ

若手講師を対象とした基本的授業技術を高める研修プログラムの開発 齋藤建樹・長倉 守

いては、年度の早い時期に、今回のような7回程度の短期研修を実施し、併せて日常の授業の録画やコメントを行い、各自の課題を明確にしておく。また学期に1回程度、日常の授業の録画とコメントを行い、伸びやかな課題を明確にする。或いは、若手の教師が集って模擬授業を交流する機会や、研修前と研修後等に比較の場面を設定することも考えられる。④については、働き方改革の影響で、勤務時間を越えて研修を実施することが難しくなってきた。そこで、現在行われている「若手研」等の公的な研修との連携を視野に入れ、その可能性を探る。これらの改善の方向性をもとに研修プログラムを継続的に実施していきたい。

表5 研修プログラム改善案

【短期集中研修】				
回	月日	研修内容（テーマと主な内容）	指標	項目
課外	5月上旬	参加者の日常授業の録画（研修期間中に助言等）		
1	5月中旬	オリエンテーション 等		
2	5月下旬	「意図が明確で分かりやすい発問」を身につけるために ・模擬授業の例示・指標の解説 ・発問づくり演習	1・2・3	発問
3	5月下旬	「明確で端的な作業指示」を身につけるために ・模擬授業の例示 ・指標の解説 ・指示の演習	4・5・6	指示
4	6月上旬	「授業の心地よいスピード感（リズムやテンポ）を身につけるために ・模擬授業の例示 ・指標の解説 ・模擬授業演習	10	応用・ 双方向
5	6月中旬	「子どもへの対応力（非言語的な対応を含む）を身につけるために ・模擬授業の例示 ・指標11の解説 ・ほめ言葉演習	11	応用・ 双方向
6	6月中旬	「あたたかな表情（笑顔）・適切な声の大きさとトーン」 「子どもへの目線（子どもと目が合う）」を身につけるために ・指標の解説 ・「笑顔」「声」「目線」の演習	7・8・9	非言語・ 空間認識
7	6月下旬	研修のまとめ ・参加者による総合模擬授業演習	1～11	総合
課外	7月上旬	参加者の日常授業の録画（前回との比較解説）		
【中長期フォローアップ研修】				
回	月日	研修内容（テーマと主な内容）	指標	項目
8	夏休み中	模擬授業研修（主に2学期教材の授業準備）	1～11	総合
9	10月頃	模擬授業研修（1学期との比較解説・助言等）	1～11	総合
課外	11月頃	参加者の日常授業の録画（前回との比較解説・助言等）		
10	2月頃	模擬授業研修（2学期との比較解説・助言等）	1～11	総合

6. おわりに

現在、全国的に若手教員の数は増加傾向にある。若手の中でも、初任者に対しては教育委員会の支援による手厚い研修が行われているが、講師に対しては公的な指導、支援が行われていない。そのため、十分な経験を積むことなく教壇に立つ講師も少なくない。そこで、若手講師を対象にした研修が急務であると考え、発問や指示などを中心とした基本的授業技術を高める研修プログラムを開発し、若手講師4人を対象として全7回にわたる研修を実施した。そのうえで結果と考察をもとに研修プログラムの改善の方向性を提示した。以下では、研修プログラムに関する本研究の成果と課題について述べる。

成果については、次の三つに整理することができる。

一つは、若手講師に対して、基本的授業技術を向上させる研修プログラムを開発できたことである。授業力量形成のための具体的な道筋を示すことができた。これは、先行研究における基本的授業技術を踏まえ、基

本的授業技術を細分化して11の要素として具体的に示したことで、自己の足りない部分を認識するきっかけとなり、今後どのような方向で努力すればよいかを明確にすることができたと考える。

二つは、若手講師の基本的授業技術に向上が見られたことである。これは、基本的授業技術に関する自己評価、最終レポート自由記述、本研修への評価といった参加者による評価と筆者による評価をもとに明らかになったことである。具体的には、明確な発問・指示、具体的な作業指示、笑顔、目線等、比較的すぐに授業に取り入れることができる技術を身に付けることができたということである。講師たちは、従前から力量形成に向けての意欲はあったものの、何をどうすればよいか分らなかった。その方法を本研修により認識し、進んで自己の実践に取り入れることができたと考える。

三つは、本研修プログラムの有効性を確認できたことである。これは、基本的授業技術を11の指標に具体化し、その一つ一つについて研修するという研修全体の組み立てや、模擬授業の例示、指標の解説、実技や模擬授業演習といった研修方法が、講師たちのニーズに応えるものであったということである。本研修に対して、講師たちは終始意欲的に取り組み、その効果を実感しながら学ぶことができたと考える。

以上のような本研究の成果は、次の二点のような応用や展開が可能である。

一つは、多くの学校での採用である。本研修は、30分間の研修を7回行うという、短期的、集中的に実施できるものである。それゆえ、勤務にあまり負担をかけない簡便な研修方法として、多くの学校で広く採用することができる。

二つは、対象を授業技術の向上に関心のある教員に広げることである。若手講師に限らず、日々の実践に悩む教師は数多くいる。そのような教師に対しても、具体的な力量形成のための方略を示すことができ、教師の授業技術の向上、ひいては、児童・生徒の資質・能力の向上に寄与することができる。

一方、本開発実践の残された課題としては、次の三つに整理することができる。

一つは、本研修はあくまでも、基本的授業技術の力量形成のための入門にあたるものであり、これによって教師の授業技術に関する問題が全て解決するわけではないということである。これは、本研修で扱う基本的授業技術が、教師として身に付けるべきことの基本中の基本であること、これを出発点として、これから後に学ぶべきことは多くあるということである。真の力量形成を旨とするのであれば、本研修からさらに踏み出し、教師自身が自ら研修を深めていく必要がある。

二つは、本研修が示した基本的授業技術の中には、容易には身に付けることができない要素があることである。これは、その技術についてただ知っているというだけでは、すぐには実践に結び付かず、実際の授業の中での意図的な実践や弛まぬ修練によって、はじめて獲得されるものであるといえる。したがって、短期間の研修にとどまらず、中長期的なフォローアップや見届けが必要となってくる。

三つは、時間的な制約である。これは、本研修を学校内で実施するとなると、どのような時間にどのような位置づけで行うのがよいかを検討する必要があるということである。公的に保障されている研修とは異なり、自主的に実施する研修という位置づけであるならば、原則として勤務時間外で行わなくてはならない。もしこの研修が、校長によって学校運営上不可欠なものであると認められるならば、勤務の一環として実施することができる。そのためには、本研究の成果を明らかにし、このような研修が本当に必要なものであるという認識を高めることができるようにすることが大切である。よって、よりよい研修プログラムの開発を今後も継続して実施していきたい。

参考文献

- 大分県教育センター (2016)、ユニバーサルデザインの良さを取り入れた学級・授業づくりハンドブック、
<https://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2000538.pdf>
- 大西忠治 (1988)、発問上達法、民衆社、195p.
- 大前暁政 (2015)、教育方法と授業技術を意識化させ、習得させるための「教育方法論」の実践、教師学研究、16、pp.1-11
- 岐阜県総合教育センター (2020)「教員のキャリアステージ」における資質の向上に関する指標【小学校】
<https://www.gifu-net.ed.jp/ggec/kyoikusihyo/>

齋藤喜博（1983）、授業の展開、国土社、285p.

自己調整学習研究会（2016）、自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術、北大路書房、255p.

千葉県教育委員会（2020）、令和版 授業改善のためのセルフチェックシート、

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/kj-nanbou/shidoushitsu/documents/reiwaseruhukaisetu.pdf>

徳島県立総合教育センター（2020）、とくしま 授業技術の基礎・基本、

https://www.tokushima-ec.ed.jp/jokwoa3p3-1299/?action=common_download_main&upload_id=15862

長野県教育委員会（2013）、長野県教員研修体系

https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyogaku/kyoshokuin/shiryo/documents/kenshutaikai_1.pdf

羽野ゆつ子（2015）、教職課程における授業技術の学習、同志社大学教職課程年報、5、pp.40-51

向山洋一（1984）、授業の腕を上げる法則、明治図書、233p.

向山洋一（2009）、教育技術入門、明治図書、209p.

吉本均（1977）、発問と集団思考の理論、明治図書、192p.

吉本均（1980）、授業成立の教授学、明治図書、186p.

